後記

今月も引續き病氣に惱まされた。大した事はないのだが、風邪のひきこみから氣管支カタルと鼻カタルとを起したらしく、すぐに參つてしまふ。よくなると芝居を見て又惡くするらしい當分東京へやつて貰へないらしいので悲觀してゐる。誰かゞ、東京の役者が喜んでゐるでせうと云つた。

鴻池幸武氏から木挽町の批評と、特に淨瑠璃の「風」についての御研究をお願ひして寄せて頂いた。氏は文樂研究の若き一權威で、現在早稻田演劇博物館勤務「吉田榮三自傳」の好著がある。

病氣で思ふやうに原稿が書けず、僅か四日間で仕上げたので、非常に讀みづらからうと思ふが、今回だけ御赦し願ふ。何しろ、四日の內二日は水ばなかみつゝ苦鬪したのだから、讀者の方がたまるまいと御同情申し上げる。新協劇團の「神聖家族」と左團次魁車の「累と西山物語」とは、やむなく來月廻しにした。兩方共言ひ度い事が山々ある。

創刊號第二號共、あと三十冊ほどしか餘つてゐない。第三號は四十冊程もあらうか。若し知人の方で同好の方がいらつしやるなら、一日も早く御紹介願はないと、品切れになると思ふ。一寸御傳へしておく。

扉の寫眞は畏友下村正夫君から貰つた。鴻池氏と下村君とに誌上から厚く御禮申し上げる。猶、寫眞は輕井澤での作ださうである。